

**「我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。」**

わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を、赦しましたように。(マタイによる福音書6章12節)

わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を、皆赦しますから。(ルカによる福音書11章4節)

主の祈りの中での罪と記された言葉は、聖書では「負い目」という表現になっています。「負い目」とは、ユダヤ的な表現で、負債、罪責、過失、罪悪などとも言えます。

主の祈りの文を読んでもみると、我らが罪を犯した者を赦すことが、我らの罪が神様に赦される条件のようですが、翻訳による問題があるようです。

人間の赦しが先行するのではなく、神様に赦された者として隣人に対する赦しが求められているのです。それは条件ではなく、自分が赦され、憐れみを受けた者としての結果的な生き方です。

我らの真の罪を赦すことができる方は神様のみです。我らが赦すことは、人間相互間の誤りや罪責のことで、神様との関係と人間の相対的な罪の区別が必要です。この祈りの文が示すのは、隣人を赦すことと、神に赦されることとは、離されない不可分の関係であることを示しています。

神様に愛され、召し出された者は、神の義を求めるはずです。この世に正しい者はいないのです。つまり、神様の前で、罪なき、負い目がないものはいないのです。そのような私たちのために主は独り子イエスを与えてくださいました。その愛に照らされて、我らは罪人である私自身を赦してくださった恵みを知り、他人を赦すことができるのです。他人を赦す心なくては、神様の前に立つことができないのです。

使徒パウロは言います。「互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借り(負債)があってはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。(ローマ13:8)」

主の赦しの中で、お互いに赦し合い、それを証する共同体が教会です。主の十字架によって示された福音が、教会に綱なる一人一人を通して実現されていくのです。

「我らの罪を赦してくださったように(過去形)、我らに罪を犯すものを我らが赦すことができますように(現在形)」と心から祈りましょう。

**\*共に祈りましょう**

- ・独り子イエス・キリストを通して、私たちのすべての罪を赦してくださった神様に感謝しましょう。
- ・私が他の人に負い目があるならば、その負い目を返していく勇気と力を与えてください。そして、その人が私を赦すよう主の御導きを祈りましょう。
- ・聖なる霊が注がれ、私たちに負い目がある人を赦す心が与えられますように、赦せないと思う人を赦せる心をくださいと祈りましょう。
- ・海老名教会が、主が教えてくださったように、互いに赦し合い、愛し合う、主の体であり続けられますよう祈りましょう。